

ソーシャル ICT グローバル・クリエイティブリーダー育成プログラムの教育活動

木戸 冬子† 國吉 康夫†

東京大学大学院情報理工学系研究科†

1. はじめに

東京大学大学院情報理工学系研究科が責任部局として推進している「ソーシャル ICT グローバル・クリエイティブリーダー育成プログラム

(GCL)」(プログラムコーディネーター: 國吉 康夫) は、文部科学省において平成 23 年度より実施している「博士課程教育リーディングプログラム」で、平成 24 年度 複合領域型(情報)として採択されている教育プログラムである。GCL が育成目標とするリーダー人材は、「情報および制度・経済の横串とグローバルな視点で現代の社会・経済システムの動態を理解し、本質的な問題や可能性を発見する能力と技術を有し、さらに問題を解決する能力を有するイノベーション人材」である。

本研究では、GCL で実施しているイノベーション人材育成のためのユニークな教育活動の 1 つとして、今年度より始めたハッカソンによる教育活動について検証する。

2. ハッカソン

ハッカソン(Hackathon)とは、Hack と Marathon を組み合わせた造語である。海外における大学主体のハッカソンへの取り組み事例としては、Stanford University d.school[1], MIT [2], University of Pennsylvania[3]などで、実施の実績がある。我が国における大学での実施実績としては、2014 年 4 月にお茶の水女子大学とマイクロソフトとの連携による国際的な女性ハッカソン大会コンテストの日本大会 International Women's Hackathon 2014, Japan [4]がある。

GCL では、今年度から教育プログラムの一環としてハッカソンの実施を開始している。

2014 年に GCL で主催したハッカソンは、Tea Time Hackathon (TTH) [5]と JPHACKS[6]の 2 種である。

Tea Time Hackathon は、東京大学に所属する女子学生(学部生・大学院生)を対象としたもので、GCL の 2 期生 (M1) 5 人と GCL を支援する学部学生 (B4) 2 名の計 7 名が GCL リーダーズチームとして、協力企業 6 社 (AWS, サイバーエージェント, Google, 日本ビジネスシステムズ, LINE, リ

クルートホールディングス) の支援の下、企画から運営までを担い、ハッカソンの企画から運営を実施することにより、教育効果を狙うものである。

TTH には、学部 1 年生から博士課程 2 年生までの多様な女子学生 36 名が参加登録し、1 チーム 3 人で構成された 12 チームが、「学生生活に必要なアプリ」をテーマに、企画から Android での実装までを行った。文系学部(文系研究科)の割合はほぼ 50%で、大部分がプログラミング経験のない初心者だった。これに対し、GCL リーダーチームが事前準備として、アイデアソン、JAVA と Android の講習会を協力企業の支援を得て開催した。ハッカソン当日の 2 日間は、インフルエンザで欠席した 1 名を除く 12 チーム (35 名) が参加し、実装を中心に行い、2 日目の午後に発表および評価・表彰まで実施した。開発されたアプリ 12 個は表 1 の通りである。

発表は、実際の Android デモ機の動作に加え、利用場面をイメージした動画や寸劇等で行われた。協力企業 6 社が発表と実際のデモ機での動作を審査し、①アイデア、②ユーザビリティ、③基本動作の 3 つの点で評価を行い、審査の結果、チーム初心社の「アプリロッカー」が優秀賞を受賞した。優秀賞以外の賞については、以下に記すとおりである。

①アイデア賞

サイバーエージェント賞:

チーム e 「進捗どうですか」

Google 賞:

チーム 0zero to 3tree 「Gibook」

②ユーザビリティ賞

AWS 賞: She 「ふ〜きいん」

LINE 賞: SHORT 「pekopoke」

③基本動作賞

日本ビジネスシステムズ賞:

チーム初心社 「アプリロッカー」

リクルート賞:メルヘンハッカー「Bochi Meshi」

JPHACKS は、全国の大学生(院生含む)が対象で、企画運営は GCL の教員が行った。大学が主催として行うものとしては、国内最大規模で、参加登録者(エントリー者)は 230 名、その中から 120

名 32 チームが選抜され、ハッカソンに参加した。

JPHACKS で狙う教育効果は、GCL 学生がチームを編成し、ハッカソンに参加し成果を目指すことである。

JPHACKS では、事前学習は行わず、ハッカソンの 2 日間は、「テクノロジーを駆使して、人々の性格を劇的に変える〇〇を開発しよう」をテーマに、実装を中心に作業し、2 日目の夕方に発表を実施した。審査の結果、決勝（アワードイベント）に出場したのは 9 チームで、グランプリはチーム spiritualDB の spiritualAxsh（スピリチュアル握手）が受賞した。

3. 状況と傾向

GCL では、修士課程新 1 年生の志望者の中から毎年 60 名程度選抜し、さらに修士課程 2 年に進級する時点で、GCL に残る学生を 20 名程度選抜する。平成 25 年度は 57 名中 20 名が GCL の 2 年に進級している。平成 26 年度については、現在、選定中である。

TTH の実施の目的は、リーダーチームがチームとしてメンバーが協力して、プロジェクトを企画から運営まで実施することによる教育効果である。GCL の 2 年への進級結果としては、リーダーチームの 5 名のうち 2 名が GCL 2 年への進級が確定し、1 名が進級を検討し、2 名が進級せずという状況である。

TTH のリーダーチームの GCL2 年への進級割合は 40% であるが、内訳は、博士への進学希望者の 2 名が GCL2 年に進級し、修士で卒業を予定している 2 名が GCL の 2 年に進級せず、博士への進学を悩んでいる 1 名が進級を検討中という状況で、博士進学と GCL2 年への進級との相関が高い結果となった。

JPHACKS では、GCL2 期生（M1）のメンバー 2 名を含むチーム 200 OK が「Sight 世界が聴こえる拡張デバイス」で決勝に進出し、協力企業のリクルートが賞を授与した。GCL2 年への進級結果としては、チーム 200 OK のメンバーの GCL2 期生（M1）2 名うち、1 名が進級を予定し、1 名が進級せずという状況である。

JPHACKS の参加学生 GCL の 2 年への進級割合は 50% であるが、博士進学を目標としている 1 名が進級を予定し、修士で卒業を予定している 1 名が進級せずというという状況で、博士進学と GCL2 年への進級との相関が高い結果となった。

4. むすび

本研究では、GCL のユニークな教育活動である TTH と JPHACKS に参加した GCL 学生について、博士進学と GCL2 年への進級との相関が高いこと

が解った。また、GCL2 年への進級の要因となった博士進学の動機づけについては、次の研究課題である。

最後に、ハッカソンの教育効果については、計量的な評価も重要であり、計量化の方法論確立は、今後の研究課題としたい。

謝辞

GCL でハッカソンを実施するにあたり、ご協力を頂いた株式会社ギブリーの新田章太氏に深く感謝致します。

参考資料

- [1] <http://dschool.stanford.edu/hackd/>
- [2] <https://www.hackmit.org/>
- [3] <http://2014s.pennapps.com/>
- [4] <https://atnd.org/events/49368>
- [5] http://www.gcl.i.u-tokyo.ac.jp/events/t_t_hackathon/
- [6] <https://JPHACKS.com/>

表 1：TTH の開発アプリ一覧（発表順）

チーム名	サービス名	サービス内容
メルヘン ハッカー	Bochi Meshi	ぼっち飯を解決するアプリ
Void++	スタラボ	学問に特化した SNS
春風	MANATY	教える・教わるプラットフォーム
SHORT	pecopoke	東大女子向け、飲食店の情報共有サービス
サラダ	ともはん	時間が空いていて、誰かと会いたい友人と繋がれる
コレ colors	ゆにから	イベント共有サービス
とんこつ 侍	Stocking	ストック型のトークアプリ
0zero to 3tree	Gibook	東大生向け、古本交換サービス
初心社	アプリ ロッカー	特定のアプリを一時的に消して、脱スマホ依存
Fresh French	imagineer	大学生のための人生設計 SNS アプリ
She	ふ〜き いいん	男女比率からたまる東大女子のストレスを、吹き矢を吹いて物理的に吹き飛ばす
e	進捗 どうですか	タスクを楽しく煽り合うサービス